

スピノザの心身並行論への疑義

松 田 克 進

序

スピノザの心身並行論（Mind-Body Parallelism⁽¹⁾）は、デカルトの心身相互作用説に端を発するいわゆる心身問題に対する哲学的に非常に興味深い回答の一つである。その論点は、哲学事典的に圧縮すれば、〈人間精神と人間身体とのあいだに存在するのは因果関係（causation）ではなく対応関係（correlation）である〉というものである。この立場に立てば、デカルトが直面した〈心身の相互作用をどのように説明するか〉という問題は確かに消去される。なぜならば、そもそもそのような相互作用は存在しないからである。また、この立場は、〈物理的世界が法則的に閉じている〉という科学的な世界観とおそらく抵触しない。なぜならば、人間精神が人間身体に因果的に作用しないということは——念力のようなものを認めないかぎり——人間精神が物理的世界の法則性を攪乱し得ないということを含んでいるからである。そして、心身並行論には第三のメリットも存在する。それは、精神内の心的事象を身体内の物理的事象（典型的には脳活動）に還元することから一線を画すことができる——言い換えれば、唯物論（物理主義）との差異を確保できる——ということである。

以上のようなもろもろの理論的メリットゆえに、スピノザの心身並行論は、単にスピノザ研究や近世哲学史研究の枠内においてのみならず、現代の〈心の哲学（Philosophy of Mind）〉においてもしばしば議論の対象となってきた。そして私も、かつてはそれを非常に説得的な理論とみなしていた。しかし、私の見方は今では異なる。私は今では、スピノザの心身並行論の理論的メリットは総合的にはそれほど大きくはない——否むしろ、それはデカルトの心身相互作用説が抱えていたのとは別の深刻な問題を抱え込んでいる——と捉えている。

「心身間の関係は因果関係ではなく対応関係である」という言説は魔力的で

ある。問題が解けたように気持ちにさせるのである。心身の「因果関係」の周辺には謎がちりばめられているが、心身の「対応関係」には一見それほど手ごわい謎は潜んでいないような気がするからである。しかし、そもそもこの「対応関係」とは何なのか、また、なぜそのような「対応関係」が成り立つのか、ということ冷静に考え始めると、状況の相貌が次第に変わる。この相貌の変化を描くことが本論で私が意図するところである。

I 心身並行論

スピノザの心身並行論を、スピノザの理論展開そのものに忠実に定式化することは実に骨の折れる作業（気の遠くなるような作業）である。なぜならば、スピノザの心身並行論は、実体・属性・様態（さらには神）をめぐるスピノザの壮大かつ難解な形而上学体系の一部として理論展開されているからである。そのような作業を私はかつて松田（2009）の一部において詳細に行った。⁽²⁾ 私は本論ではその作業を再現しない（そもそも紙幅の関係で不可能である）。以下に私はスピノザの心身並行論の主要な論点を書くが、そのさい私は、スピノザ自身の理論展開からはかなり自由な様式で、また、現代の〈心の哲学〉の問題関心にできるだけ対応するような様式で書くことをお断りしておく（とはいえ、もちろん重要なテキストは適宜引用する）。

1.1 心身間の因果関係の否定

『エチカ』第3部命題2でスピノザは次のように心身間の因果関係を明確に否定する。「身体が精神を思惟するように決定することはできないし、また精神が身体を運動ないし静止に、あるいは他のあること（もしそうしたものがあるならば）をするように決定することもできない」。現代的に言うならば、スピノザによれば、精神内の心的事象と身体内の物理的事象の間には因果関係は存在しないということになる。粗雑な抽象論を避けるために、このことが意味することを日常的な感覚知覚および随意運動の場面をモデルとして考えてみよう。

今仮に、タクシーを待ちくたびれていた私が空車タクシーを見つけてそれを止めるために右手を挙手したと仮定する。この状況に含まれている感覚知覚と随意運動を、デカルト（的な心身相互作用論者）ならば、大略次のように分析するであろう。

〈感覚知覚〉

- A) 眼がタクシーから光学的刺激を受ける
- B) その光学的刺激が視覚神経を通して眼から大脳へと伝わる
- C) 大脳内の特定の神経細胞（便宜的に「V」と名付ける）が発火し、その結果として精神内に色の感覚が生じる
- D) 精神が色の感覚をもとに〈タクシーが来た〉という判断を下す

〈随意運動〉

- E) 精神が、右腕を挙げようと意志する
- F) この意志作用の結果として、大脳の特定の神経細胞（便宜的に「W」と名付ける）が発火する
- G) この神経細胞の発火が運動神経を通して右肩の筋肉の状態を変える
- H) その結果、右肩関節の筋肉が収縮し、右腕が挙がる

以上のデカルト（的な心身相互作用論者）の図式のうち、スピノザはC）とF）を拒否する。なぜならば、（既述のように）彼にとっては心身間に因果関係は存在しないからである。

このようなスピノザの立場のメリットは、もちろん、本性を異にする精神と身体との間の因果作用を説明するというデカルトが直面した課題を削除ないし消去できるという点にある。念のために哲学史的な経緯をごく簡単に復習しておこう。——デカルトは、生前にガッサンディやエリザベトから次のような趣旨の疑義を示された。すなわち、デカルトは感覚知覚や随意運動において心身が相互作用をすると言うが、いかなる延長性をも持たない精神と延長性のみを本性とする身体とのあいだにはそもそも因果関係は成立し得ないのではないか、という疑義である。これに対してデカルトは、心身の因果的結合は「原初的な概念 (notion primitive)」であって、それを理論的に説明することはできない、と答えた。要するに、デカルトは心身結合を、説明を受け付け⁽³⁾ない事実、すなわち〈生の事実 (brute fact)〉と見なしたわけである。デカルト以後の主要な合理論者たち（マルブランシュ、スピノザ、ライプニッツなど）は、彼らが見るところのデカルトのこの理論的な行き詰まりを何とか克服しようとした。この彼らの方策の一般的傾向は、心身間に（真の）因果関係が存在することを否定するというものである。そのようにしてデカルトが直面した心身相互作用の問題を消去してしまうのである。しかし、もちろんそれだけでは問題状況は

収まらない。なぜならば、心身間の関係は、もしも因果関係ではないとするならばどのような関係なのかを説明するという——実は容易ならざる——課題が残るからである。

1.2 心身間の対応関係の肯定

スピノザは心身間の対応関係を二段階に分けて〈証明〉している。その第一段階は、『エチカ』を象徴する命題のひとつである第2部命題7である。それは「観念の秩序および連結は事物の秩序および連結と同一である⁽⁴⁾」という短い命題である。一般にこの命題が心身の対応関係を主張していると捉えられがちであるが、それは全く不正確である。なぜならば、スピノザは延長と思惟以外にも無限に多くの属性があることを前提として、それら無限個の属性に係る——その意味できわめて大規模な——命題としてこの第2部命題7を提示しているからである。すなわち、この命題の意味するところは、無限個の属性のうちの任意の属性（これを「X」と表記しよう）と、それを対象とする思惟属性（これを「CX」と表記しよう）との間に、「秩序と連結が同じである」という対応関係が存在することなのである。この第一段階を基盤として、『エチカ』第2部命題13において第二段階が遂行され、心身の対応関係の〈証明〉が完了する。これは次のような命題である。「人間精神を構成する観念の対象は身体である、あるいは現実⁽⁵⁾に存在するある延長の様態である、そしてそれ以外の何ものでもない」。この命題が意味しているのは、人間精神が属する思惟属性が対象とする属性は延長属性であるということである。（それゆえ、いま延長属性を「E」と表記するならば人間精神の属する思惟属性は「CE」と表記される。）そして、この命題13によって、人間精神と「秩序と連結が同じ」という対応関係が存在するものが何であるかが確定する。すなわち、それは延長属性に属する何らかの様態、要するに何らかの物体である。この物体こそが人間身体なのである。

では、心身並行論の立場に立てば、感覚知覚および随意運動について先ほど挙げた事例はどのように分析されるであろうか。それを以下に記す。心身二元論による説明と異なる項目にはダッシュ（[˘]）を付している。すなわち、項目G[˘]とF[˘]である。それらの内容の傍点部分に注目すれば、二元論的説明において心身間の因果関係が占めていた位置を心身間の対応関係が占めていることを確認することができる。

〈感覚知覚〉

- A) 眼がタクシーから光学的刺激を受ける
- B) 視覚神経を通して眼から脳へと刺激が伝わる
- C) 脳内の神経細胞Vが発火し、それに対応して精神内に色の感覚が生じる
- D) 精神が色の感覚をもとに〈タクシーが来た〉という判断を下す

〈随意運動〉

- E) 精神が、右腕を挙げようと意志する
- F) この意志作用に対応して、脳内の神経細胞Wが発火する
- G) この神経細胞の発火が運動神経を通して右肩の筋肉の状態を変える
- H) その結果、右肩関節の筋肉が収縮し、右腕が挙がる

なお、心身並行論に立てば、物理的事象 A)・B)・G)・H) に対応して何らかの心的事象が精神内で、また、心的事象 D) に対応して何らかの物理的事象が身体内で生起しているはずであるが、論述が煩瑣になるのを避けるためこれらについては表記を省いた。その意味で以上の分析は不完全であるが、この不完全性は本論以下の議論に影響するものではない。

II 対応関係とは何なのか

上記のように、スピノザの立場に立てば、デカルト的（ないし心身相互作用論的）説明における項目 C と F は項目 C' と F' に書き換えられる。そして、この書き換えによって、スピノザはデカルトが直面した〈心身の相互作用をどのように説明するか〉という問題を削除ないし消去することができた。これは、一見すると、理論的進展であるかのように思われる。しかし、そもそも精神内の心的事象と身体内の物理的事象との対応関係——スピノザの言葉では「秩序と連結が同じ」という関係——とは何なのだろうか。あるいは、項目 C' と F' に即して具体的に言い換えるならば、身体内の神経細胞Vの発火と精神内の色の感覚との間に存在するとされる対応関係とは何なのだろうか、また、右手を挙げようという精神内の意志作用と身体内の神経細胞Wの発火との間に存するとされる対応関係とは何なのだろうか。

2.1 それは論理的関係ではない

きわめて重要なことを確認する。それは、当該の対応関係（例えば、神経細胞Vの発火と色の知覚との関係）は次の例が示すような強い論理的関係ではない、ということである。今、「10」を十進法表記の数とする。これを二進法で表現すれば、「1010」となる。また、二進法表記の「1010」を十進法で表現すれば「10」となる。このように十進法表記の「10」と二進法表記の「1010」との間には対応関係があり、しかもそれは、厳密なアルゴリズムに基づく関係である。心身間の対応関係は、このような強い論理的関係ではない。——また、当該の対応関係は次の例が示すような弱い論理的関係でもない。「テーブルの上に花瓶がある」を英訳すれば“*There is a vase on the table.*”となり、“*There is a vase on the table.*”を和訳すれば「テーブルの上に花瓶がある」となる。このようにこれら二つの文の間には対応関係があり、その対応関係は、厳密なアルゴリズムに基づいているわけではないが、それでも二つの言語を架橋する統語論的（そして、その意味で論理的）なマニュアルないしルール集に基づいている関係である。心身間の対応関係は、このような弱い論理的関係でもない。神経細胞Vの発火を解読して色の知覚を導き出したり、色の知覚を解読して神経細胞Vの発火を導き出すような論理的マニュアルは存在しないのである。（もちろん、神経生理学の書物のなかにはこのような対応関係に言及しているものがあるかもしれないが、それらは決して論理的マニュアルではないはずである。）

今私は、心身間の対応関係が論理的関係ではない、と言った。これはスピノザ自身が認めていることである。彼は『エチカ』第2部命題6証明で次のように言う。「各々の属性は他の属性の助けを借りずにそれ自身によって考えられる〔略〕。それゆえ、各属性の様態はその属性の概念を含み他の属性の概念を含まない⁽⁶⁾」。このことは、延長属性の様態は延長属性の概念を含み、思惟属性の概念を含まないことを、また、思惟属性の様態は思惟属性の概念を含み、延長属性の概念を含まないことを含意している。すなわち、スピノザ自身の立場に則しても、物理的事象（これは延長様態である）と心的事象（これは思惟様態）とは論理的に無関係なのであって、一方の理解は他方の理解に何ら寄与しないのである。要するに、物理的事象と心的事象は〈不可通約的（incommensurable）〉なのである。そうすると、心身間の対応関係は、何らかの事実的關係と見なさねばならないことになる。

2.2 それはいかなる事実的関係か

では、身体内の物理的事象と精神内の物理的事象との間の対応関係とはどのような事実的関係なのか。もちろん、それは因果関係ではない（これは心身並行論の二つの柱のひとつである）。では、因果関係以外のどのような事実的関係なのか。本論で用いている具体例に則して言い換えれば、神経細胞Vの発火と色の感覚との対応関係とは、因果関係以外のどのような事実的関係なのか、また、右手を挙げようという意志作用と神経細胞Wの発火との対応関係とは、因果関係以外のどのような事実的関係なのか。

スピノザの文言に注目する。『エチカ』第2部命題7備考で彼は書く。「我々が自然を延長の属性のもとで考えようと、あるいは思惟の属性のもとで考えようと、あるいは他の何らかの属性のもとで考えようと、我々は同一の秩序を、すなわち諸原因の同一の連結を、言い換えれば同一物が順々に生起することを見出すであろう⁽⁷⁾」。この文言によって描かれている対応関係とは何か。あるとき、身体内の物理的事象が $P1 \rightarrow P2 \rightarrow P3$ と継起し、そのさい、精神内の心的事象が $M1 \rightarrow M2 \rightarrow M3$ と継起したとする。この継起ないし秩序ないし連結が同一である、とは何を意味しているのか。それは、それとは別のときに身体内の物理的事象が $P1 \rightarrow P2 \rightarrow P3$ へと継起するならば、そのときもやはり、精神内の心的事象が $M1 \rightarrow M2 \rightarrow M3$ と順々に継起するはずであり、逆に精神内の心的事象が $M1 \rightarrow M2 \rightarrow M3$ と継起するならば、そのときもやはり、身体内の物理的事象が $P1 \rightarrow P2 \rightarrow P3$ と順々に継起するはずである、ということである。要するに、P1とM1とは恒常的に共起し、P2とM2とも恒常的に共起し、P3とM3とも恒常的に共起する、ということである。すなわち、心身間の対応関係とは、詰まるところこのような〈恒常的共起 (constant concomitance)〉という事実的関係のことなのである。

感覚知覚と随意運動の例にもどれば次のようになる。大脳内の特定の神経細胞Vの発火と色の感覚との対応関係とは、それらの二つの事象の恒常的共起のことである。また、右手を挙げようという意志作用と大脳内の神経細胞Wの発火との対応関係とは、それら二つの事象の恒常的共起のことである。——これが、心身並行論における対応関係の意味である。

III 心身並行論の問題

3.1 恒常的共起をどう説明するのか

確かにスピノザは、デカルトが直面した心身因果の問題を削除することに成

功している。この点に限って評価するならば、スピノザの心身並行論には理論的メリットが有る。それは間違いない。しかし、スピノザは別のところに新たな問題を抱え込んでいる。それは、なぜ神経細胞 V の発火と色の知覚とは恒常的に共起するのか、なぜ右腕を挙げようという意志作用と神経細胞 W の発火とは恒常的に共起するのか、という問題である。これを「恒常的共起の問題」と呼ぶことにする。

状況を整理すればこうなる。スピノザは心身間には因果関係はないが対応関係があると主張した。この主張によって、彼は確かに心身因果の問題を削除した。しかし、他方で彼は、恒常的共起の問題を抱え込んだ。要するに、ひとつの難問が消えひとつの難問が生まれたのである。難問の所在が変わっただけなのである。ゆえに、この新しい難問に対してスピノザが説得的な解決案を提示できていないならば、総合的見地からすれば、スピノザの立場に対して理論的メリットを認めることはできないのである。

私の最終的な結論は、恒常的共起の問題に対する説得的な解決案はスピノザにはないというものであるが（これから論じる）、もちろん、スピノザの思想に何らかの解決案が見当たらないわけではない。それは大きく二つのタイプの議論に分けることができる。第1のタイプは〈実体一元論にもとづく議論〉であり、第2のタイプは〈心身同一説にもとづく議論〉である。以下、順々にこれらを評価する。

3.2 実体一元論にもとづく議論

もしも神経細胞 V の発火と色の知覚が恒常的に共起しないならば、そのことは、延長属性の秩序（＝物理的事象の連結）と思惟属性の秩序（＝心的事象の連結）が一致していないことを意味する。このような不一致はスピノザの実体一元論によって否定される。それゆえ、神経細胞 V の発火と色の知覚とは恒常的に共起しなければならない。そして、この論法を拡張すれば、恒常的共起という関係は身体内の物理的事象と精神内の心的事象とのあいだに一般的に成立しなければならない。——以上のような議論が、〈実体一元論にもとづく議論〉である。この議論を理解するためには、スピノザが「実体」「属性」「様態」という用語の指示対象をいかなるものと見なしていたかを解読しないといけない。そのような解読作業を私は松田（2009）で行ったが、その詳細を本論で再現することはできない。本論に係わる要点のみを以下に記す。スピノザにとって、延長属性とは無限に多くの延長様態（物理的事象）からなる集合であ

り、思惟属性とは無限に多くの思惟様態（心的事象）からなる集合である。これらの二つの集合には共通部分はない（共通部分は空集合である）。延長属性の秩序（すなわち物理的事象の因果的連結）が延長実体であり、思惟属性の秩序（すなわち心的事象の因果的連結）が思惟実体である。他方、スピノザは神を『エチカ』第1部定義6で「無限に多くの属性からなる実体」と定義するとともに、そのような神が存在することを同命題11で〈証明〉する。すなわち、スピノザによると、神のみが実体であり（この主張が〈実体一元論〉である）、それゆえに、延長実体と思惟実体は同一である。この同一性は、取りも直さず、物理的世界の秩序と心的世界の秩序の同一性を意味する。それゆえ身体内の物理的事象と精神内の心的事象とは恒常的に共起しなければならないのである。

以上のような実体一元論による議論は説得的であろうか。要するにこの議論は、恒常的共起の問題に対して唯一実体たる神の存在でもって回答するというものである。スピノザは神の存在をいくつもの仕方でも〈証明〉しており（それらのうちにはいわゆる存在論的証明も含まれている）、それらは確かに哲学史的に非常に興味深いものではある。しかし、それらの〈証明〉が現代の哲学的・論理的な批判に耐えうるものであるとは考えにくい。それでは、次のような解釈によって〈実体一元論による議論〉を救うことはできないだろうか。すなわち、実体一元論の〈証明〉の非説得性は不問に付し、実体一元論をひとつの根本的な（それゆえ証明を必要としない）哲学的直観として捉えるという解釈である。しかし、このような解釈によっても〈実体一元論による議論〉を救うことはできない。なぜならば、実体一元論という哲学的直観は、煎じ詰めれば物理的事象と心的事象が恒常的に共起するということを意味しており、それゆえ、〈実体的一元論にもとづく議論〉とは、結局のところ、恒常的共起を認めるという哲学的直観によって恒常的共起を説明する、という論点先取に帰着するからである。

3.3 心身同一性にもとづく議論

恒常的共起の問題に対するスピノザのもうひとつの解決案は〈心身同一性にもとづく議論〉である。これは、身体内の物理的事象と精神内の心的事象とのあいだになぜ恒常的共起という対応関係が存在するか、という問いに対して、〈なぜならばそれら物理的事象と心的事象とは数的に同一の事象だから〉と答えるというものである。確かに、神経細胞Vの発火と色の知覚とが数的に同一の事象であるならば、それらが恒常的共起するのはトリヴィアルに真であろう

し、右手を挙手しようという意志作用と神経細胞Wの発火が数的に同一の事象であるならば、それらが恒常的共起するのもトリヴィアルに真であろう。これは、一見するところ強力な論法に思われる。

実際のところ、スピノザは、『エチカ』の少なくとも三つの箇所で心身の数的同一性を判然と表明しているように思われる。それらを以下に列挙する。

- ① 第2部命題7備考：「延長の様態とその様態の観念とは同一物であって、ただそれが二つの仕方では表現されているまでである。〔略〕例えば、自然の中に存在する円と、同様に神の中にあるこの存在する円の観念とは同一物であり、それが異なった属性によって説明されるのである」。
- ② 第2部命題21備考：「身体の観念と身体とは、言い換えれば〔略〕精神と身体とは同一個体であって、それがあるときは思惟属性のもとで、あるときは延長属性のもとで考えられるのである」。
- ③ 第3部命題2備考：「精神と身体とは同一物であってそれがときには思惟属性のもとで、ときには延長属性のもとで考えられるまでである」。

さて、これらのテキストを基にして我々は、〈スピノザは物理的事象（延長様態）と心的事象（思惟様態）との数的同一性を主張していた〉と解釈してもよいのだろうか。この問題——すなわち、様態の貫属性的な数的同一性の問題——は、スピノザ解釈における難所のひとつである。そして、複数の有力なスピノザ研究者——例えば、20世紀ではゲルー⁽⁸⁾、世紀が変わってからはナドラー⁽⁹⁾やデラ＝ロッカ⁽¹⁰⁾——は、スピノザが延長様態と思惟様態の数的同一性をも主張したと解釈している。私自身は当該のテキストが心身同一性を主張しているとは解釈しない⁽¹¹⁾が、本論でこれらのテキストを持ち出した目的はあくまでも〈心身同一性にもとづく議論〉が〈恒常的共起の問題〉に対する説得的な解決策となっているか否かを評価するという点にあるので、本論では解釈問題には踏み込まず、一種の作業仮説として、スピノザが当該テキストで心身同一性を主張していることを前提する。

それでは、〈心身同一性にもとづく議論〉は説得力を有するだろうか。先ほども書いたように、もし物理的事象と心的事象が数的に同一であるならば、それらが恒常的に共起することはトリヴィアルに真であろう。この側面だけに注目するならば、この議論は恒常的共起の問題を見事に解決しているように見える。しかし他方で、心身同一性は壊滅的な問題を心身並行論に持ち込んでしま

う。すなわち、明白な論理的矛盾という問題である。この点について長々と説明する必要はなかろう。例えば、もしも神経細胞 V の発火と色の知覚が数的に同一の事象であるとするならば、神経細胞 V を引き起こしたところの生理的事象が色の知覚の原因であることになり、それゆえ、心身間の因果関係の否定という、心身並行論の二つの柱のうちのひとつが否定されてしまうのである。また、もしも右手を挙げようという意志作用と神経細胞 W の発火とが数的に同一の事象であるとするならば、まさにその意志作用が、神経細胞 W の発火が因果的に引き起こした筋肉収縮の原因であることになり、それゆえ、やはり、心身因果の否定が否定されてしまうのである。——状況を整理する。心身同一性は確かに〈恒常的共起の問題〉を解決するのにある意味で有効だが、心身並行論の柱のひとつである心身間の因果作用の否定と矛盾するために心身並行論を論理的に破綻させてしまう。喩えるならば、心身同一性という〈薬〉は確かにある病状の特効薬としては効果満点であるが、生命そのものを危険にさらす〈劇薬中の劇薬〉なのである。そして、この状況に鑑みて、〈心身同一性にもとづく議論〉は恒常的共起の問題に対する解決策としては決して説得的ではあり得ないのである。

結び

デカルトは心身が相互作用することを〈生の事実〉と位置付けた。すなわち、彼は心身関係については理論的説明を断念（ないし回避）した。デカルト直後の少なくとも何人かの合理論者たちはこの状況を乗り越えようとした。すなわち、彼らは心身関係について何らかの理論的説明を提示しようと試みたのである。間違いなくスピノザはそのひとりである。彼はそのいわゆる心身並行論によって心身関係の理論的説明を試みた。しかし、彼の試みは必ずしも成功していない。彼の理論によると、心身間にあるのは因果関係ではなく対応関係であり、この対応関係とは、身体内の物理的事象と精神内の心的事象とが恒常的に共起することである。では、スピノザはこの恒常的共起について説得的な説明を提示しているかといえば、彼の一連の議論には結局のところそれに該当するものは見当たらないのである。デカルトが心身因果の問題を解けなかったとするならば、スピノザも恒常的共起の問題を解けなかった。その意味で、スピノザの心身並行論の理論的メリットはデカルトの心身相互作用説に比して実はそれほど大きなものではなかったのである。

文献表

- Della Rocca, Michael (2008): *Spinoza* (Routledge).
- Descartes, René (1964-74): *Oeuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, 11 vols (CNRS).
- Glare, P. G. W. (ed.) (1982): *Oxford Latin Dictionary* (Oxford University Press).
- Gueroult, Martial (1974): *Spinoza II: L'âme* (Aubier Montaigne).
- 小林道夫 (1995): 『デカルト哲学の体系』(勁草書房)。
- 小林道夫 (2006): 『デカルト入門』(ちくま新書)。
- 小林道夫 (編) (2007): 『哲学の歴史 第5巻 デカルト革命』(中央公論新社)。
- Leibniz, Gottfried Wilhelm (1875-90): *Die philosophischen Schriften*, herausgegeben von C. I. Gerhardt, 7 Bde (Georg Olms).
- 松田克進 (2007): 「スピノザ」, 小林 (2007) 所収。
- 松田克進 (2009): 『スピノザの形而上学』(昭和堂)。
- 松田克進 (2011): 『近世哲学史点描——デカルトからスピノザへ——』(行路社)。
- Nadler, Stephen (2006): *Spinoza's Ethics: An Introduction* (Cambridge University Press).
- Spinoza, Benedictus de (1925): *Opera*, herausgegeben von Carl Gebhardt, 4 Bde (Carl Winter).
- Spinoza, Benedictus de (1985): *The Collected Works of Spinoza*, Vol. 1, edited and translated by Edwin Curley (Princeton University Press).
- スピノザ, ベネディクトゥス・デ (1975). 『エチカ』上・下, 畠中尚志 訳, 岩波文庫

注

- (1) 「並行論」という用語はスピノザのものではない。一般的には、これはライプニッツの創案とされている。彼は、1702年の「唯一の世界精神の教説についての諸考察 (Considerations sur la doctrine d'un Esprit Universel Unique)」において次のように書いている。「私は、魂に生じることと物質に起こることとのあいだの完全な並行論 (parallelisme parfait) を、以下を示したことによって確立した。すなわち、諸作用を有する魂 (l'âme avec ses fonctions) は物質 (matiere) とは別個のものかであるが、とはいえ、魂は常に物質の諸器官に伴われており、また、魂の諸作用は常に、それらに対応 (repondre) せねばならぬ諸器官の諸作用に伴われており、このことは〔現に〕相互的であり常に相互的であろう、ということである」(Leibniz 1875-90 vol. 6: 533)。またライプニッツは、1710年に公刊された『弁神論』においては——心身問題とは異なる文脈において——「自然の王国と恩寵の王国との調和的な並行論 (parallelisme Harmonique des Regnes de la Nature et de la Grace)」(ibid.: 113) という表現を用いている。
- (2) 松田 (2007) の一部では概略的にのみ論じた。

- (3) 「原初的概念」を持ち出すデカルトの議論については松田（2011：30-2）、小林（1995：445-6）、小林（2006：183-6）を参照されたい。
- (4) 命題7の原文は以下の通り。Ordo, & connexio idearum est, ac ordo, & connexio rerum. なお、本論ではスピノザのテキストはSpinoza（1925）に拠る。引用にさいしては畠中によるスピノザ（1925）に原則的に依拠し、部分的に引用者（松田）の判断で訳し変える。
- (5) 原文は以下の通り。Objectum ideae, humanam Mentem constituentis, est Corpus, sive certus Extensionis modus actu existens, & nihil aliud.
- (6) 原文は以下の通り。Unumquodque enim attributum per se absque alio concipitur.... Quare uniuscujusque attributi modi conceptum sui attributi, non autem alterius involvunt....
- (7) 原文は以下の通り。...naturam sub attributo Extensionis, sive sub attributo Cogitationis, sive sub alio quocunque concipiamus, unum, eundemque ordinem, sive unam, eandemque causarum connexionem, hoc est, easdem res invicem sequi reperiemus. この箇所“easdem res invicem sequi”は畠中訳（＝スピノザ 1975）では「同一物の相互的継起」と訳されているが、「相互的」では意味が通じない。後のものは前のものに継起しているが、前のものは後のものに継起していないので、継起という関係は相互的になり得ないからである。カーリー訳（＝Spinoza 1985）でも“that the same things follow one another”と訳されており、畠中訳と同じ問題を含んでいる。『オックスフォード ラテン語辞典』（＝Glare 1982）は“in vicem”の語義として以下を挙げている。すなわち、(1) In place (of); to serve (as), (2) In one's turn; (each) in turn, (3) Each for or against the other, mutually, reciprocally, (4) By turns, turn and turn about, alternately の4義である。私は、引用文中の“in vicem”は第4の意味で使われていると捉え、当該箇所を「同一物が順々に生起すること」と訳した。
- (8) ゲルーの解釈は、彼の独特な実体／属性解釈と連動している。ゲルーによると、実在的に異なる無限に多くの一属性実体（延長実体、思惟実体、等々）が無限に多くの異なる属性から成る唯一の実体を作るのと同様に、「ある属性の任意の様態は、無限に多くの他の属性におけるそれに対応する諸様態とともに、異なる属性における唯一の事物（原因ないし様態）を作る」（Gueroult 1974: 85）。なお、ゲルーの実体／属性解釈について私は、かつて松田（2009：197-214）において詳細な批判を展開した。
- (9) ナドラーの解釈は、全体としては、スピノザが精神と身体の数的同一性を認めたというものであると思われる。ナドラーは言う。「スピノザにとっては、精神と身体との間には根本的な同一性（identity）がある。それゆえ、人間には根本的な統一性（unity）がある。この同一性〔および統一性〕は、それらのあいだに存在し得るいかなる差異よりもはるかに深いものである」（Nadler 2006: 135）。ただし彼は、次のように補足することで自身の解釈に微妙な陰影をつけている。「人間身体は、人間 the human being（あるいはパーソン the person）の、

- 延長属性のもとにおける表現である〔略〕。人間精神，あるいは人間身体の観念は，この同じ人間の，思惟属性のもとにおける表現である」(Nadler 2006; 144)。このような陰影は，ナドラーの解釈をやや曖昧なものにしている。
- (10) デラ＝ロッカは言う。「彼〔スピノザ〕にとって，各々の観念と，それが並行的な延長様態とは，スピノザの言葉を使えば「同一物」(第2部命題7備考)であり，こうしてスピノザは，第2部において，有限な心的事物と有限な延長的事物との一元論をはっきりと提唱する。これは，彼が第1部で提唱する延長実体と思惟実体との一元論と類比的なものである」(Della Rocca 2008: 100)。また，「スピノザの並行論は，それら〔＝思惟様態と延長様態〕が同一であるという主張に行き着く」(Della Rocca 2008: 101)。
- (11) 私自身の解釈を付言しておけば，それは，〈これらのテキストは，物理的事象と心的事象が恒常的に共起すること以上のことを主張してはいない〉というものである。

キーワード スピノザ 心身並行論 デカルト 心身相互作用説 心身問題